

「足を休める場所」

ルカの福音書 7:36~38

はじめに

今日の箇所の内容は、はっきり言って謎だらけの出来事です。あるパリサイ人の家で食卓についていたイエシュアのもとに、一人の「罪深い女」と呼ばれる女性が泣きながらやって来て、イエシュアの足をその涙で濡らし、髪の毛で拭いて口づけし、さらに香油を塗るといふ、非常に意味不明な行動が記されています。この「罪深い女」と呼ばれる女性はおそらく娼婦、売春婦です。当時の一般女性は頭を布ですっぽりと覆い、決して人前に髪の毛を晒しません。髪を晒すこと、それは今の感覚で言うならばノーメイクどころかトップレスで人前に出るような恥ずかしい行為だったからです。当時これを恥ずかしげもなくできたのは娼婦かまたは悪霊につかれた者だけでした。そしてパリサイ人は律法違反を取り締まる当時の警察、検察のような存在でしたから、彼らに近づけば娼婦は激しく非難されることはもちろんのこと、最悪の場合、姦淫罪で処刑される恐れさえありました。何より宗教的聖潔を厳守する彼らがそのような女をやすやすと家に入れてしまうことも不思議です。また女性は最初から泣いていたともありますがその理由も全く不明です。一体全体この出来事にはどのような意味が秘められているのでしょうか。それではこの謎だらけの出来事を、いつものようにヘブル語の最初の言及の視点で読み解いてみることにしましょう。

1. パリサイ人の招き

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:36 さて、あるパリサイ人が一緒に食事をしたいとイエスを招いたので、イエスはそのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。

あるパリサイ人がイエシュアと食事を「をしたいと」言って家に招いたとあります。一見イエシュアに対して好意的な態度が見受けられます。しかしそれはあくまでも表面的なものであり、これをヘブル語の視点で見ると、全く異なる状況が見えてくるのです。ヘブル語で「(～したいと) 求める」ことをパーカシュ(פָּקַשׁ)と言いますが、この言葉は本来、以下のような箇所に使われました。

創世記【新改訳 2017】

31:36 するとヤコブは怒って、ラバンをとがめた。ヤコブはラバンに向かって言った。「私にどんな背きがあり、どんな罪があるというのですか。私をここまで追いつめるとは。

31:38 私があなたと一緒にいた二十年間、あなたの雌羊も雌やぎも流産したことはなく、また私はあなたの群れの雄羊も食べませんでした。

31:39 野獣にかみ裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かずに、私が負担しました。それなのに、あなたは昼盗まれたものや夜盗まれたものについてまでも、私に責任を負わせました。

これはヤコブが伯父のラバンのもとで働いていた時のものですが、ラバンがヤコブに「責任を負わせ」、無実の者に罪をなすりつけたという出来事の中に、聖書で最初のパーカシュがあります。このように罪のない者を罪ある者とする、という意味が本来のパーカシュにはあるのです。ですからこのパリサイ人のイ

イエシュアに対する招き、パーカシュには、ユダヤ人が自分たちの罪を神の御子メシアであるイエシュアになすりつけ、背負わせ、イエシュアを罪ある者とする、という状況、出来事が指し示されているのです。それはもちろんイエシュアの十字架の死を指し示しています。上記の出来事には実はその「型」が秘められているのです。前回も述べましたがパリサイ人(פְּרִישִׁיִּים)という名にはペレシュ(פְּרֶשֶׁת)「汚物、糞」という言葉が秘められており、それは宿営の外で焼き捨てられるもの(出エジプト 29:14)を表しているのです。イエシュアはパリサイ人をはじめとする全イスラエルの罪を、まるで食事の杯(ルカ 22:42)を飲み干すように受け入れてその身に背負われ、エルサレムの外のゴルゴタで惨めに殺され、すべてのものに見捨てられたのです。このように、イエシュアがパリサイ人のパーカシュ、招きに応じてともに食事をされたという上記の描写にはイエシュアの十字架の死の「型」が秘められているのです。ではこれを指し示す状況を受けて、次に登場する人物に目をとめてください。

2. 罪深い女

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:37 すると見よ。その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持って来た。

ここで「一人の罪深い女」が登場します。「すると見よ」とあるように、この女性の取った行動、行為は解き明かされなければならない、読み取らなければならない、注目、刮目すべき重要なものです。じっくりと見てまいりましょう。まず彼女は「イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り」とあり、イエシュアとパリサイ人とのこの事実を受けて行動に出たことがわかります。今述べたようにそれはイエシュアの十字架の死を指し示しています。その事実を聞き「知り」動き出す、立ち上がる、行動を開始する存在がこの女性には「型」として表されているのです。イエシュアの十字架の福音を聞き、これ信じ、生き方を変えていく存在、そしてそれはもちろん私たち教会を指し示しています。またこの女性は「香油」を持って来たとありますが、これはローカハ(רֶקֶח)といい、イスラエルの祭司たちが幕屋とすべての祭具、契約の箱に注いだ「聖なる注ぎの油」(出エジプト 30:25)を指し示しています。それはつまり、私たち異邦人の教会もまたイスラエルの神であられる主イエシュアに仕える祭司として選ばれているという事実を表しているのです。まさにこう記されているとおりです。

I ペテロの手紙【新改訳 2017】

2:9 しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。

2:10 あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。

このように、私たち教会は異邦人でありながら主の「あわれみを受けて」主イエシュアを知り、引き寄せられることにより、イスラエルとともに「祭司」となるべく選ばれたのです。その成就、実現はイエシュ

アの地上再臨によって建てられる「神の国」においてですが、その事実がすでにこの「一人の罪深い女」の姿に表され、神のご計画の中に私たち教会の存在が定まっているのです。

3. 涙と髪

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:38 そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った。

次にこの女性はイエシュアの「うしろから…近寄り」とあります。これは私たち教会がイエシュアの行かれる所につき従って行く者であることを表しています。そして彼女は「イエスの足を涙でぬらし始め」しました。後述でもありますが、足を洗うことは来客をもてなす一つの行為です。しかしそれはあくまでも当時の社会常識としての理解でしかありません。聖書には常に出来事の裏に秘められた事実、奥義が存在します。ヘブル語でこの「足」のことをレゲル(לֶגְלָא)といいます。この最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

8:8 またノアは、水が地の面から引いたかどうかを見ようと、鳩を彼のもとから放った。

8:9 鳩は、その足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地の上から引いたのを知った。

8:12 さらに、もう七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

これはノアの箱舟の物語の一場面ですが、ノアのもとから一羽の鳩が「足を休める場所」を求めて放たれたことが記されており、ここに聖書で最初のレゲルがあります。鳩は一度目は「足を休める場所」を見つけられずノアのもとに帰って来ました。実はこの出来事は初臨のイエシュアの「型」となっているのです。イエシュアは当時のイスラエルの中にご自分がメシアとして迎え入れられる場所を見つけることができず、復活の後、鳩がノアの箱舟に戻ったように、天の御父のみもとに帰って、上って行かれました。そして次に放たれた鳩は、オリーブの若葉をくわえて帰って来たとなり、これは教会の携挙の「型」なのです。やがてイエシュアは私たち教会を若葉のように、永遠の肉体によみがえらせて天に引き上げてくださいます。そして最後に放たれた鳩は「もう彼のところに戻って来なかった」とあり、これは地上再臨されるイエシュアの「型」です。イエシュアはこの地に新しい世、「神の国」を建てられ、もう天に帰られることなくそこに住まれるからです。このように、地上のすべての生き物を滅ぼした大洪水、それが過ぎ去り、再び現れる地、新しい地に「足を休める場所」を求めること、それはすなわち、世の終わりに地上に再び遣わされる、再臨されるイエシュアが求めておられ、ご自身によってこの地に建てられる「神の国」を指し示しているのです。実際に女性がイエシュアに近づいた時、イエシュアは食事の席に着かれ（当時のユダヤ人は身を横たえて食べる）、



その足は立っても歩いてもおらず、まさにこの時イエシュアの足は休んでいる状態にあったということもこの事実を裏付けています。このように、ここに示された「**イエスの足**」とは、イエシュアが天から遣わされ、来られること、イエシュアの再臨の事実を指し示しているのです。

そして女性はそのイエシュアの足を「**涙でぬらし始め**」ました。述べたように、ただ足を洗うためだけならば、たらいに水を入れて持ってくれば良かったはずですが。なぜ「**涙**」だったのでしょうか。ヘブル語で「涙」をディムアー(הַדְּמָאָה)、また「泣く」ことをダーマ(דָּמָה)といいます。どちらも「血」という意味のダーム(דָּמָה)が含まれています。皆さんは涙の成分、涙の正体をご存知でしょうか。涙とは血液から赤い色(ヘモグロビン)などを抜いた血漿(けっしょう)といわれる透明な液体からできています。ですから実際に涙のもとには血液、血なのです。つまり彼女はイエシュアの足をダーム「血」で染めたのです。イエシュアの足は再臨を表していると述べました。さらにそれが血に染まっている、この状態が指し示すものは以下の預言です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「**確かで真実な方**」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は**血に染まった衣をまとい**、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

この預言は終わりの日、黙示録の獣、反キリストとその勢力を、イスラエルに敵対するすべての者と「**戦いをされる**」ために、天の軍勢を率いて地上再臨されるイエシュアについてのものです。その御姿は「**血に染まった衣をまとい**」とあり、イエシュアの足を濡らした涙の意味がここにあるのです。

さらにこの女性は涙で濡らしたイエシュアの足を「**髪の毛で**」ぬぐいました。つまり彼女の長い髪の毛でイエシュアの足を覆ったのです。ヘブル語の「毛、髪の毛」のことをセーアール(שָׂעָר)と言い、それは本来、赤い毛衣のような姿で生まれたイサクの子エサウ(創世記 25:25)、後にエドム「赤い」(創世記 25:30)と呼ばれた人物を指し示した言葉であり、これもまたイエシュアの地上再臨の事実を指し示した預言に結びつきます。

イザヤ書 63:1【新改訳 2017】

「**エドム**から来るこの方はだれだろう。ボツラから**深紅の衣を着て来る方**は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、**救いをもたらす大いなる者**。」

このように、女性がイエシュアに対して行った行為には、見事なまでにイエシュアの地上再臨の事実が指し示されている、秘められているのです。そして先ほども述べた、彼女がイエシュアの「**うしろから…近寄り**」という行為にはこの地上再臨のイエシュアにつき従う天の軍勢、聖徒となった(黙示録 19:14) 私たち教会、神の子羊イエシュアの花嫁(黙示録 19:8)としての私たち教会の姿が表されていたということになります。

4. 口づけと香油

さらに女性の行為は続きます。次に彼女はイエシュアの足に「口づけして香油を塗った」ともあります。「口づけする」という意味のナーシャク(אֶשֶׁק)の最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

27:26 父イサクはヤコブに、「近寄って私に口づけしてくれ、わが子よ」と言ったので、

27:27 ヤコブは近づいて、彼に口づけした。イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。

「ああ、わが子の香り。【主】が祝福された野の香りのようだ。

27:28 神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるよう。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

このように「口づけ」ナーシャクは本来、ヤコブすなわちイスラエルに対する神の祝福を指し示しており、これは本来、イスラエルの父祖アブラハムに対して約束されたものです（創世記 12:2~3）。イスラエルの民を祝福し、イスラエルを中心にして統治される、新しい世界、主イエシュアがこの地上にお建てになる「神の国」の姿が、イエシュアの足に「口づけ」た女性の姿に「型」として表されているのです。

そして女性はイエシュアの足に「香油を塗」りました。ここに使われている「(香油を)注ぐ」という意味のナーサフ(שָׁמֶן)についても見てみましょう。最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。

このように、「油を注いだ」と訳されるナーサフの本来の意味も「口づけ」ナーシャクと同様の事実を指し示しており、神である主がアブラハムの子孫、イスラエルの民を「ベテル」すなわち「神の家、神の国」の民として選んでおられ、彼らを通してこの「地のすべての部族」全人類を祝福しようというご計画の内実を繰り返し強調しておられることがわかります。そしてそれらの計画の全てがイエシュアの足、すなわちイエシュアが足を休める、足を置く、住まう場所を求めてこの地に来られる、まさに足を運ばれること、イエシュアの地上再臨によって成就、実現、完成することがこの「一人の罪深い女」の行動の一部始終に

は表されて、いや神の国の奥義として秘められているのです。ちなみに、上記の箇所ではヤコブは自分が「枕」にした石に油を注いでこれを「神の家」と呼びましたが、初臨のイエシュアは「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」(ルカ 9:58) と言われ、「神の国」をお建てになりませんでした。しかし再臨のイエシュアは、ヤコブすなわちイスラエルのこの預言を成就するためにベテル「神の家」「神の国」を実現するために帰って来られるのです。

このように「一人の罪深い女」と呼ばれた女性は、イエシュアによって、イエシュアにみもとに引き寄せられ、「神の国の奥義」を指し示す働きをしました。それは私たち教会を表している「型」だと述べましたが、今日、私たちはこの奥義を秘められたまま、隠されたままではなく、このように解き明かして語る、神のご計画の内容を明らかにして宣べ伝える存在となってきています。それはこの女性の行動、行為がそうであったように常識では理解し難いような、異様とも言える、そのような話です。しかし彼女が身の危険を顧みず、大胆にこれらのことを行ったように、たとえ蔑まれようとも、罵られ、馬鹿にされようともこの働きを止めることはできません。

以前、とある牧師たちの集まりで、私は今日のようにヘブル語の視点から聖書から神のご計画について語る機会が与えられました。それを聞いた中で最年長の牧師先生がこう言われました。「まるで宇宙人の言葉を聞いているようだった」と。私の解き明かしは他の牧師にはそのように異様なもの、異質なものと思われるようです。全く同感です。誰より語っている私自身がそう思いながら語っています。もっと人の心や気持ちに寄り添うような、今の人に理解しやすい、受け入れやすいメッセージにすればいいのにとつくづくそう思います。にもかかわらず私は自分でそれを変える、止めることができません。最近ますますそうなってきました。はっきり言って私のメッセージはクリスチャンの目から見ても未信者の目から見ても異常だと思います。しかし私だけではありません。それを毎回、普通に聞いている皆さんも同じです。なぜ集まって来るのですか。異常だとは思いませんか。このように、まさに私たちの教会は、意味不明な行動をとったこの「一人の罪深い女」なのです。しかしイエシュアは彼女を用いて「神の国」の奥義を示されました。ですからこれからも私は、私たちの教会は聖書に秘められた神のご計画を、それを成し遂げられる主イエシュアの再臨を宣べ伝えてまいります。ともに進んでまいりましょう。聖霊の助けと導きのままに。